

ハンス・F・K・ギュンターの人種論

原 田 一 美

Rassentheorie von Hans F. K. Günther

HARADA Kazumi

要旨

1922年に刊行された『ドイツ民族の人種学』は、大きな評判を呼び、ベスト・セラーとなった。著者のハンス・F・K・ギュンターは一躍「人種論のスター」に躍り出て、ワイマル期ばかりか、ナチズム期の人種学、人種主義に大きな影響を与えることになる。

本稿では、このギュンターに焦点を当て、彼の人種論の内容を検討し、それに若干の考察を加えた。

ギュンターの人種論は、人文科学と自然科学を総合するような内容をもっており、その「科学性」ゆえに多くの知識人を惹きつけた。また、外観から人種を判断できるまなざしを鍛えることを重視し、多くの顔写真を掲載することによって、人びとが日常生活で目にする顔からその人の「人種」を判定できるような「基準」を提示した。このようなギュンターの人種論が評判を呼んだことは、ワイマル期における人種意識の高まりを示すとともに、逆に彼の著作が人種意識をさらに高めるのに貢献したということもできる。

また、ナチズム期には、彼の人種分類が学校や党の諸団体においても教材として利用された。親衛隊では、ギュンターが提示した多様な人種の表現型が隊員を選別する際の重要な基準にされたのである。

はじめに

ホロコーストのような、第三帝国において実施された人種主義的「蛮行」は、なぜ可能だったのだろうか。それは、ゴールドハーゲンが主張するように、ドイツにおける強烈的な反ユダヤ主義的伝統のためだったのだろうか。それとも、クーンズが言うように、ドイツ人は、ナチ党政権掌握後のプロパガンダや教育によって反ユダヤ主義者に変化したと言えるのだろうか¹⁾。

平成21年10月30日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部 文化コミュニケーション学科教授

筆者は、これまでの論考で次のような点を明らかにしてきた。まず第一に、「人類学的人種主義」や「衛生学的人種主義」(＝優生学)の普及という点では、ワイマル期にいたるまで、ドイツと欧米各国のあいだにそれほど大きな違いは見られなかったということ。しかし、第二に、ワイマル初期に激しく展開された「黒い汚辱キャンペーン」を通して、人種主義が成長するための肥沃な土壌が形成され始めたということ²⁾。

このキャンペーンが盛り上がりを見せていた1922年、『ドイツ民族の人種学』と題する著作が刊行され、大きな評判を呼んだ。著者はハンス・フリードリヒ・カール・ギュンター。彼は、この著作によって一躍ドイツにおける「人種論のスター」へと躍り出るが、ワイマル期には、他にもさまざまな人種論に関する書物が出されている。本稿では、このギュンターの人種論の内容を検討することによって、ワイマル期における人種主義の普及の問題について考えてみたい。

ギュンターは、第三帝国期には、ヒトラー(『わが闘争』)とローゼンベルク(『20世紀の神話』)を除けば、最高の販売部数を誇る作家であり、ドイツにおける人種主義の普及に大きな影響を与えたと考えられるにもかかわらず、それほど知られていない。第三帝国期の教育学に「人種科学」がどのような影響を与えたのかを分析したハルテンたちの研究によれば、ギュンターの著作は最も頻繁に引用される文献の一つであり、彼は人種科学的言説の最も影響力あるパイオニアであった³⁾。ギュンターがこのような人物であり、クーンズが主張するように、第三帝国下でなされた教育やプロパガンダが人種主義的政策の施行にとって決定的な役割を果たしたのだとすれば、ギュンターの人種論の中身を知ることには、第三帝国における人種主義の問題を考察するうえで非常に重要となるはずである。

このような問題意識から、以下では、まずギュンターの経歴と著作を簡単に紹介し(第Ⅰ章)、その後、彼の人種論の内容を検討し(第Ⅱ・Ⅲ章)、最後に若干の考察(第Ⅳ章)を加えてみたい。

1) Daniel Jonah Goldhagen, *Hitler's Willing Executioners. Ordinary Germans and the Holocaust*, New York 1996 (ダニエル・J・ゴールドハーゲン(望田幸男監訳)『普通のドイツ人とホロコースト——ヒトラーの自発的死刑執行人たち』(ミネルヴァ書房, 2007年)); Claudia Koonz, *The Nazi Conscience*, The Belknap Press of Harvard University Press 2003 (クロードディア・クーンズ(滝川義人訳)『ナチと民族原理主義』(青灯社, 2006年))。

2) 以下の拙稿を参照。『「ナチズムと人種主義」考(1)——20世紀初頭までの系譜』『大阪産業大学論集 人間環境論集』5(2006年3月), 『「黒い汚辱」キャンペーン——『ナチズムと人種主義』考(2)』『大阪産業大学論集 人間環境論集』6(2007年6月)。

3) Hans-Christian Harten/Uwe Neirich/Mathias Schwerendt, *Rassenhygiene als Erziehungsideologie des Dritten Reich. Bio-bibliographisches Handbuch*, Berlin 2006, S.86. ちなみに、ギュンターと同様に頻繁に引用されたのは、人種衛生学の「古典」と言われるバウアー／フィッシャー／レンツの共著と、ルートヴィヒ・フェルディナント・クラウスの著作である。

I

まず、ギュンターの経歴と著作活動を簡単に紹介しておこう。

1891年に宮廷音楽家の息子としてフライブルク・イム・ブライスガウに生まれたハンス・F・K・ギュンターは、フライブルクとパリの大学で比較言語学とドイツ文学を学び、1914年、フライブルク大学で博士号を取得した⁴⁾。第一次世界大戦が勃発すると志願兵になろうとしたが、兵役不適格とされたために従軍できなかった。戦後、ギムナジウムの教員試験に合格して、しばらくドレスデンとフライブルクで代用教員として教壇に立った。

1920年に出版した著作『騎士・死・悪魔—英雄的思考』（以下『騎士』と略記）⁵⁾は、民族至上主義者たちのあいだで評判を呼び、『騎士』の出版社の社主であるユーリウス・レーマンからドイツ民族と人種に関する本の執筆を依頼された。レーマンは出版準備のための前金まで支払ったので、ギュンターは教職を辞めてこの仕事に専念することができた。こうして1922年に出版されたのが、『ドイツ民族の人種学』（以下『人種学』と略記）⁶⁾である。これは、500頁を超える大部の著作であったが、大きな評判を呼んで版を重ねることになる。また、1929年には、分量を3分の1以下に押さえた『ドイツ民族の人種学・縮刷版』（以下『縮刷版』と略記）が出され、これもベストセラーとなった⁷⁾。

ギュンターは、1923年から29年までスカンジナビア諸国（まず、ノルウェー、その後スウェーデン）に滞在し、ノルウェー人女性と結婚している。だがその間も、毎年、ミュンヘンのレーマンの元を訪ねていたという⁸⁾。実際、『ドイツ人のあいだの北方思想』（以下『北方思想』と略記）（1925年）、『人種と様式』（1926年）、『貴族と人種』（1926年）といった著作が次々とレーマン社から出版されている⁹⁾。1929年に家族と共にドイツに帰国したときには、ギュンターはすでに最も読者の多い人種研究家、「北方思想」の理論家として

4) ギュンターの経歴については、以下を参照。Hans-Jürgen Lutzhöft, *Der Nordische Gedanke in Deutschland 1920-1940*, Stuttgart 1971, S.28-47; Harten/Neirich/Schwerendt, *op.cit.*, S.139-144.

5) Hans F.K. Günter, *Ritter, Tod und Teufel*, München 1920.

6) Hans F.K. Günter, *Rassenkunde des deutschen Volkes*, München 1924. 初版は1922年であるが、本稿で利用したのは、1924年出版の第5版である。

7) Hans F.K. Günter, *Kleine Rassenkunde des deutschen Volkes*, München/Berlin 1939（初版は1929年）。『人種学』の方は、1942年までに12万5000部、『縮刷版』は29万5000部印刷されている。Harten/Neirich/Schwerendt, *op.cit.*, S.87.

8) H. F. K. Günther, *Mein Eindruck von Adolf Hitler*, Pähl 1969, S.15.

9) Hans F.K. Günter, *Der nordische Gedanke unter den Deutschen*, München 1925 ; H. F. K. Günther, *Rasse und Stil*, München 1926 ; H. F. K. Günther, *Adel und Rasse*, München 1927（初版は1926年）。

の名声を得ていた。

ナチ党との接点は、ギュンターがドイツに一時帰国していたときに滞在先に行っていた友人のパウル・シュルツェ＝ナウムブルクであった。シュルツェ＝ナウムブルクのところには、ナチ党のダレーやフリックが頻繁に訪れていた¹⁰⁾。ギュンターは1930年に社会人類学の教授としてイエナ大学に招聘される。この招聘は、テューリンゲン州内相となったフリックが大学側の反対を押し切って敢行したものであった¹¹⁾。就任講義（テーマは「民族移動期以降におけるドイツ民族の人種的衰亡の原因」）には、ヒトラーとゲーリングも姿を見せ、夜には右派系学生団体の松明行進も行われたという¹²⁾。

ナチ党の政権掌握後、ギュンターは国家と党から庇護を受け、さまざまな形で顕彰された。1935年には、ベルリン大学に招聘され、ここには彼のための研究所（「人種学、民族生物学、農村社会学研究所」）まで設置された。ライヒ保健局人口・人種政策専門家委員会の委員にもなっているし、35年には、第一回目の「ナチ党科学賞」を受賞している。1939年末には、フライブルク大学に移り、これ以降、故郷の大学で教鞭を執りながら、執筆活動を行った¹³⁾。

1944年には彼がいたフライブルクの研究所が空襲で破壊され、ギュンター一家は戦争の最後の日々をワイマルのシュルツェ＝ナウムブルクのところで過ごした。ソ連軍がワイマルに接近したためにフライブルクに帰ったが、ギュンターはそこでフランス軍当局によって大学教師の職を剥奪され、3年間拘留された¹⁴⁾。

戦後の活動にも触れておこう。ギュンターは、戦後も、フリーのライターとして執筆活動を続けた。ヴィストリヒによれば、第三帝国や最終解決は存在しなかったかのように¹⁵⁾。徐々に彼の以前の著作も再版されるようになり、1969年には、『アドルフ・ヒトラーの印象』という弁明の書を出版している¹⁶⁾。ただ、本人は、この本が出版される前、68年9月に死

10) ここにはヒトラーも何度か客として来ていたというのが、ギュンター自身はここでヒトラーに会ったことはない主張している。Günther, *Mein Eindruck*, S.15.

11) この招聘に対する大学側の抵抗については、以下を参照。Lutzhöft, *op.cit.*, S.38-40. なお、ホスフェルトは、大学教授資格をもたないギュンターの招聘にいたる経緯を詳細に跡づけ、この出来事を第三帝国における学問のイデオロギー化、画一化の先触れであったと結論づけている。Uwe Hossfeld, Die Jenaer Jahre des 'Rasse-Günther' von 1930 bis 1935, in: *Medizinhistorisches Journal* 34(1999), S.47-103.

12) Lutzhöft, *op.cit.*, S.18f; Harten/Neirich/Schwerendt, *op.cit.* S.140. ギュンターによれば、ヒトラーがやって来たのは、フリックの招待によるものであった。Günther, *Mein Eindruck*, S.18.

13) Harten/Neirich/Schwerendt, *op.cit.* S.140-43. 彼はすでに1937年から、研究活動に専念できるよう、地方の小さな大学に移りたいと申請を行っていたという。

14) Lutzhöft, *op.cit.*, S.45f.

15) Robert Wistrich, *Wer war Wer im Dritten Reich*, München 1983, S.104.

亡した。

以上の簡単な経歴紹介からもわかるように、第三帝国におけるギュンターの活動はそれほど目立ったものではない。また彼自身も、公務から離れた自由な研究生生活を望んでいたようである。だが、すでに1933年7月の省令は、新しい歴史教科書を作成する際、ギュンターの人種論を人種学的記述の公式基準とするように命じており¹⁷⁾、彼の人種論は第三帝国における人種主義教育に大きな影響を与えたと言える。そこで次章では、ギュンターの人種論の内容について検討したい。

II

ここではまず、ギュンターが人種をどのようなものと考えていたのか、どのような人種分類を行ったのかについて見ておこう。

ヨーロッパでは、18世紀から19世紀にかけて、博物学者や人類学者たちが盛んに人種分類を行い、いわゆる「コーカサス人種」（＝白人種）もさらにさまざまな下位集団に分類された。なかでももっとも一般的な分類法は、北方人種、地中海人種、アルプス人種であった¹⁸⁾。ギュンターも『騎士』（1920年）ではまだこの分類を用いている¹⁹⁾が、『人種学』（1924年版）では、4種類の人種分類——「北方人種（die nordische Rasse）」、「西方人種（die westische Rasse）」、「東方人種（die ostische Rasse）」、「ディナル人種（die dinarische Rasse）」——を採用し、名称も地中海人種を「西方人種」に、アルプス人種を「東方人種」へと変更している²⁰⁾。

『人種学』は、これら4つの人種の身体的特徴および精神的特徴、ドイツ語圏やヨーロッパ全体における諸人種の分布状況などを叙述したものである。その内容紹介に入る前に、

16) Günther, *Mein Eindruck von Adolf Hitler*.

17) Harten/Neirich/Schwerendt, *op.cit.* S.87, Anm.289.

18) 拙稿「『ナチズムと人種主義』考（1）」、59頁。

19) Günther, *Ritter*, S.139. この著作は人種分類を目的にしたものではないが、ドイツ民族には、これら3つの人種からの血が入り込んでいるとして、北方人種のほかに、「地中海人種」と「アルプス人種」の特徴にも言及されている。S.146fも参照。

20) Günther, *Rassenkunde*, S.25f. westisch, ostischという語は、ドイツ語の辞書によれば、それぞれ「地中海沿岸地域の」、「アルプスの」という意味であって、方角を表す言葉ではないので、「西方人種」、「東方人種」とするのは問題かもしれない。だが、ギュンターがこの言葉を用いたのは、nordischを意識してのことであると思われるし、nordischはこれまで一般に「北方」と訳されてきたので、あえて「西方人種」、「東方人種」と訳しておきたい。ちなみに、ギュンターによれば、「地中海人種」という言葉を用いれば、アイルランドやイングランド南部にもこの人種が住んでいることが忘れられてしまうという。

「人種」と「民族」との関係について触れておかねばならない。ギュンターによれば、人種の問題を扱った多くの著作が、人種の定義を明確にすることなくこの言葉を使用しているために、多くの混乱や誤解が生じている。彼がとくに批判するのは、人種と言語の混同、人種と民族性（あるいは国籍）の混同である。彼によれば、ゲルマン系、スラヴ系の言語はあるが、「ゲルマン人種」や「スラヴ人種」といったものは存在しない。人種とは、科、属、種という生物の分類概念と同じように、自然科学の概念であり、測定可能で数値に表すことができる身体的特徴が、人種学の明白な構成要素なのである²¹⁾。ギュンターが主張するように、ドイツにおける民族至上主義思想や運動においては、19世紀後半以降、「民族」と「人種」が渾然一体のものとなっていくという過程が見られた²²⁾が、ギュンター自身はこのことを明確に認識していた。もっとも、このように人種学の「自然科学性」を強調しながらも、個々の人種を特徴づける精神的な態度も同様に重要であるとして、その叙述に多くのページが割かれている。

このように、ギュンターは「ゲルマン人種」や、さらに「アーリア人」という名称も拒否しており、この点ではトラーやヒムラーとは明らかに異なる。また、ナチスと言えば、「純粋なアーリア人（あるいはゲルマン人）」を称揚したというイメージがあるが、ギュンターは純粋な人種など世界中にほとんどいないことを強調している。彼によれば、ヨーロッパ人の圧倒的大部分は、したがってドイツ人も、混血児、雑種なのである（20頁）²³⁾。したがって、彼が示す4つの人種の特徴は、あくまでも「類型」（プラトンがいうイデア）にすぎない（19頁）。

それでは、ギュンターはヨーロッパにおける4つの人種「類型」をどのように特徴づけているのだろうか。まず、身体的特徴について、彼の記述を簡単にまとめたものが表1である。

表 1

	北方人種	西方人種	東方人種	ディナル人種
体格	背が高い スリム	背が低い スリム	背が低い ずんぐり	背が高い スリム
頭形・顔の幅	長頭・狭い	長頭・狭い	短頭・広い	短頭・狭い
鼻の形	細くて高い	付け根が高い	平べったい	大きい
肌の色	明るい白色	茶色味	黄褐色	茶色味
目の色	灰色・青灰色・青色	茶色	茶色	黒褐色
髪の色	明るいブロンド	黒褐色・黒	茶色・黒	黒褐色・黒

21) *Ibid.*, S.11-14.

22) 拙稿,『『ナチズムと人種主義』考(1)』, 65～68頁参照。

23) 以下、本文中に示す頁数は、すべて、Günther, *Rassenkunde*の頁数である。

表1で示した身体的特徴は、あくまでも各人種の特徴を対比させるために筆者が抜き出した一部の特徴にすぎない。ギンターは、肩幅や腰部の幅、ほお骨の高さや皮膚の厚さ、髪の毛のやわらかさ、あるいはそばかすの多い少ないまで、非常に詳細に描き出している。しかし、それぞれの人種の身体的特徴を客観的、「自然科学的」に叙述しているようにみせてはいるが、彼にとって美の基準となるのが北方人種であることは明らかであり、北方人種を高く評価する描写は随所に見られる。たとえば、肌の色に関して、彼は次のように言う。

「輝くような健康の色」と言われるものは、本来、北方人種のみ当てはまる。ほとんどすべてのヨーロッパ人がこの輝くような肌（「若々しく元気澁刺とした」）を、美しいものとイメージすることから、ヨーロッパ人の美のイメージは北方人種に由来することがわかる（54頁）。

また、髪の毛の色に関しても、北方人種の髪（ブロンド）がヨーロッパ人の美のイメージに大きな影響を与えたという。ブロンドの髪が美しいとみなされたことを示すものとして、英語のfairが「美しい」と「金髪の」という二つの意味をもっているという言語学的な説明まで行っている（61頁）。

ギンターが「美の基準」とする北方人種のイメージの対極として描き出しているのが、東方人種である。

多くの点で、東方人種のイメージは、ヨーロッパの美のイメージとは相いれない。たとえば、奇妙なことに、中世や近代の画家たちは、醜くて邪悪な人間——拷問吏や聖人の虐待者、悪徳商人など——を特徴づけるために東方人種の身体的特徴を用いてきた（82頁）²⁴⁾。

東方人種の肌に関しても、他のヨーロッパの諸人種とは違って、若者でさえ、死んだ人間のように見え、歳をとると深い皺ができるという（93頁）。また、目の色は基本的に西方人種と同じであるが、東方人種の目はあまり落ちくぼんでおらず、目の大きさも小さいので、与える印象は大きく異なる。前者は陽気で生き生きとした印象を与えるのに対して、後者の場合は、不機嫌で人を寄せつけない重苦しさを感じさせる（100頁）。

24) ギンターによれば、急進左派の風刺雑誌で描かれるドイツ軍の指導者のカリカチュアが、短くてずんぐりとした脚や広がった鼻のような東方人種の姿で描き出されているのも奇妙だという。Günther, *Rassenkunde*, S.82, Anm.1)。

ディナル人種は、西南アジア人種に非常に近い人種だという。ギュンターによれば、両者を一つの人種だと考える研究者もいるが、彼は、主に背の高さが違うという理由から、ディナル人種を西南アジア人種とは区別して、ヨーロッパ人を構成する人種の一つに入れている（124頁）²⁵⁾。

以上のように、すでに各人種の身体的特徴の描写においても、明らかに主観的な判断が紛れ込んでいるが、この傾向は「成長、老化、病気、動きの特徴」の章になるといっそう強くなる。たとえば、早熟で早く老化する東方人種に比べて、北方人種はゆっくりと成熟するために老化も遅く、老女ですら、肌は驚くほど若々しい。とくに東方人種の女性の顔の崩れ方は目立っているという（137頁）。また、動き方に関しては、北方人種の動きは落ち着いているが鈍重ではなく、女性の場合は目立って優美である（143頁）。それに対して、東方人種の動きを表すには、文字通り俗物の動き方という表現がぴったりだという。重苦しい粘り強さとも言うべき動きで、西方人種の軽やかさとも北方人種の大股での動き方ともかけ離れている（145頁）。

このように、ギュンターは、人種は「自然科学の概念である」と言いながら、文化的・社会的習慣と生物学的なものを混同している。だが、それでもまだ、身体的特徴や「成長」などについての描写には、客観的・科学的に見せるようなデータや数値も示されている。しかし、各人種の精神的特徴の叙述になると、その描写は完全に恣意的なものになる。

まず、それぞれの人種の中心の特徴と言われているものを挙げておこう。

表2

北方人種	西方人種	東方人種	ディナル人種
判断力、誠実さ、行動力	情熱性、精神的活発さ	勤勉、狭量	荒々しい力、率直さ

身体的特徴の場合と同様、精神的特徴の描写においても、ギュンターが北方人種を称揚し、その対極に東方人種をおいていることは明らかである。「北方人種のみが偉大な政治家を生み出す」（149頁）、「創造的人間が登場する頻度から、それぞれの人種の才能を調べれば、北方人種は比較にならないほど多い」（152頁）といった具合である。

これに対して、東方人種は、勤勉、仕事熱心だとされてはいるが、「俗物」であって、「高貴なもの」とは無縁であり、「本来的に指導される人種」である。他の人種よりもブルジョワの生活において繁栄するタイプであり、大衆を形成して平等を求める傾向がある。しかし、東方人種は、平等を勝ち取るためにも指導者を必要とし、この指導者はほとんどいつ

25)『北方思想』では、このことを批判するカウプに対して反論を行っており、「科学的」人種分類であっても、さまざまな考え方があったことがわかる。Günther, *Der nordische Gedanke*, S.28f.

も他の人種の人間である。たとえば、フランス革命は、東方人種と西方人種が起こした事件であるが、指導者は主として北方人種だったという²⁶⁾。このように、「俗物」、「ブルジョワ」、「大衆」、「平等」などに対するギュンターの強い嫌悪感がすべて東方人種に結びつけられており、東方人種のイメージは、「ヨーロッパの諸人種の中では一番悪い」（177頁）と断言されている。

情熱的で雄弁で社交性のある西方人種は、他方で怠惰でもある。「北方人種の行動力、東方人種の勤勉さは、西方人種には無縁」（169頁）なのである。自らに対しても、裁判官として有罪判決を下すことができる北方人種に対して、西方人種はつねに自らの最も熟達した弁護人になる（167頁）という対比も示されている。

西南アジア人種に近いとされるディナル人種の評価は、意外なことにかなり高い。北方人種と同じように「戦士の傾向およびその才能」があり、商人としての才能もある。とくに音楽的才能が顕著であり、有名な音楽家の多く（パガニーニ、ベルリオーズ、モーツァルト、ハイドン、リスト、ヴァーグナー、ショパンなど）がディナル人種の特徴を示しているのは偶然ではないという（179～180頁）。

以上のように、『人種学』（1924年版）で考察の対象とされたのは、ヨーロッパ人を構成する4つの人種であったが、その後ギュンターは、主要人種として東バルト人種を加えるようになった。1929年に出版された『縮刷版』では、この5つの人種について叙述され、さらに、ヨーロッパ諸民族にはファーレン人種とズデーテン人種の血も流れ込んでいるととして、これらについても簡単に触れられている²⁷⁾。

ここでは、以上の4つの人種に加えて、東バルト人種の身体的・精神的特徴について紹介しておこう。興味深いことに、『縮刷版』では、新たに加わった東バルト人種が北方人種の対極として扱われているように見える。たとえば、狡猾で執念深く、卑屈でしつこい人間を描こうとする画家は、東バルト人種の身体的特徴をモデルにするという（上述したように、『人種学』では、東方人種がそのようなモデルであるとされていた）。東バルト人種は大衆の精神の持ち主で、指導される人種である。したがって、適切な指導が行われ

26) 東方人種の精神的特徴については、以下を参照。Günther, *Rassenkunde*, S.171-178.

27) もっとも、ギュンターによれば、『縮刷版』の叙述は、基本的には『人種学』第12版（1928年）に従っているのので、『人種学』においても1928年までに修正されていたと思われる。（1926年に出版された『人種と様式』では、すでに5つの人種になっている。）ファーレン人種は、この人種の特徴が今日最も明白に認識できるヴェストファーレン地方にちなんで名づけられ、これを北方人種の変種とみる研究者もいるという。また、ズデーテン人種は、東ドイツ、ベーメン、ポーランドに見られる人種で、ギュンターによれば、ほとんどの研究者はこれを人種とはみなしていない。Günther, *Kleine Rassenkunde*, S.19f.

ば、従順な臣民になるとされるが、東バルト人種に関する叙述は全般に、「現実感覚や決断力の欠如」、「粗暴な傾向や陰険なたくらみを好む傾向」といった具合に、否定的な評価に満ちている²⁸⁾。

最後に、ユダヤ人についても触れておこう。『人種学』には当初、付録として「ユダヤ民族の人種学」が付け加えられていた²⁹⁾が、第12版（1928年）からは省かれるようになったので、1930年に独立した書物として出版された（『ユダヤ民族の人種学』）³⁰⁾。

まず、ギュンターは、ユダヤ人は「人種」と理解されてはならないという。世界中のほとんどすべての種族や民族は2種類以上の人種からなっており、この点ではヨーロッパ人もユダヤ人も同じである。すでに触れたように、「アーリア人種」や「ユダヤ人種」（あるいは「セム人種」）という表現は、言語学的議論と人種の問題とを混同しており、現在も続く混乱を引き起こしている³¹⁾。しかし他方で、ユダヤ人を、ユダヤ教徒の「信仰共同体」とみなすのも間違っており、ユダヤ人を「特別な民族」として把握する場合にのみ、ユダヤ人の本質や現象形態などをきちんと理解できるという。

このように、ギュンターによれば、ユダヤ人は主としてヨーロッパ外の種々の人種からなる「特別な民族」である。そして、全ユダヤ人の10分の9を占める東方ユダヤ人（アシュケナジー）を構成する人種は、西方アジア人種・オリエント人種・東バルト人種・中央アジア人種・北方人種・ハム人種・黒人種であり、南方ユダヤ人（スファラディー）は、オリエント人種・西方人種・ハム人種・黒人種から構成されるという³²⁾。だが、このような説明では、結局何も言っていないに等しく、「ユダヤ的特徴」についても、「ユダヤ人に頻繁に現れる、主としてヨーロッパ人の目を引くようなヨーロッパ外人種の特徴といったものにすぎない」と非常に控えめである³³⁾。このためもあってか、全体的に見て、ギュンターによるユダヤ人の描写は、東方人種や東バルト人種の描写に比べても、比較的冷静なように思われる。

「ユダヤ人問題」の解決についても、「ユダヤ人と非ユダヤ人の明確な分離のみが、ユダヤ人問題の尊厳ある解決である」としているが、一方で、ドイツの教養あるユダヤ人の中には、ドイツの精神生活に愛着を感じ、根を下ろしていると感じている者がいるので、こ

28) *Ibid.*, S.66-68.

29) 『人種学』第5版（1924年）では、432頁から504頁。

30) Günther, *Rassenkunde des jüdischen Volkes*, München, 1931（初版は1930年）。本として出版されるにあたって、大幅に加筆されており、分量は5倍になっている。

31) *Ibid.*, S.14.

32) *Ibid.*, S.191.

33) *Ibid.*, S.208.

のような解決は、一部のユダヤ人や非ユダヤ人には過酷なものに思えるかもしれないと述べて、ドイツに対するユダヤ人の愛着にも一定の理解を示している³⁴⁾。

そもそもギュンターが唱道する「北方思想」は、ユダヤ人それ自体を「劣等」だと考えるわけではないという。彼によれば、ユダヤ人が「劣等」なのは、北方人種に規定されたドイツ人の遺伝に関してのみであって、逆に西南アジア人種に規定されたユダヤ人の遺伝にとっては、北方人種の人間が「劣等」なのである³⁵⁾。

それでは、「北方思想」とはどのような考え方だったのであろうか。次章では、この点について検討したい。

Ⅲ

ギュンターによるヨーロッパ人の人種分類は、『人種学』が版を重ねるにつれて、最初の3分類が4分類になり、さらに5分類（あるいは7分類）になるというように、時とともに「精緻」なものになっていった。また、混血を通してヨーロッパ人に流れ込んでいるとギュンターが考えた、ヨーロッパ外の諸人種についても考察が行われるようになっていく。

しかし、人種分類以外に関するギュンターの主張は、処女作の『騎士』にすでに示されており、その後も基本的には変わっていない。その後になって新たに加わった主張としては、「優生学的措置の要請」を挙げることができるだけである。ここでは、彼の主張を、①北方人種の称揚、②人種意識の重要性、③19世紀批判、④英雄賛美、⑤優生学的措置の要請という5点について検討してみたい。

① 北方人種の称揚について。

ギュンターによれば、ギリシア時代やローマ時代など歴史の偉大な時代はすべて、北方人種が創り上げたものである。ただ、ローマの場合は、北方人種は貴族のみで、平民は別の人種であったという³⁶⁾。貴族が主に北方人種によって構成されるのは、ローマ時代だけではなく、ヨーロッパ全体にも言えることである。たとえば、中世におけるヨーロッパ貴族の「国際性」は、ヨーロッパ諸民族の上層（＝貴族）に北方人種の血という共通の血が流れていたことから可能となった³⁷⁾。貴族が北方人種であるというこの主張は、明らかに

34) *Ibid.*, S.345f.

35) Günther, *Der nordische Gedanke*, S.77.

36) Günther, *Ritter*, S.140f.

37) Günther, *Adel und Rasse*, S.25.

ゴビノーの影響を受けており、「階級」を「人種」によって説明しようとする試みだと言えよう（「階級の人種化」）³⁸⁾。

貴族だけではなく、偉大な芸術家にも北方人種が圧倒的に多い。イタリア・ルネサンスは北方人種の業績であり、レオナルド・ダ・ヴィンチやルネサンス期の他のほとんどの芸術家にも北方人種の血が流れている³⁹⁾。

『人種と様式』（1926年）は、5つのヨーロッパ人種と芸術の形式や内容との関係、それぞれの人種の「本質」が芸術にどのような影響を与えたのかを論じた著作であるが、ここでも、北方人種が主役で、他の人種は脇役にすぎない。「純粋に西方人種の有名な芸術家を挙げることに同様、純粋に東方人種的、あるいは東方バルト人種的芸術を見いだすことも困難」⁴⁰⁾なのである。身体的には非北方的特徴を示すバッハやフィヒテも、それぞれが音楽家および哲学者として表現している内容は純粋に北方的なものだという⁴¹⁾。

② 人種意識の重要性について。

ギュンターによれば、北方人種の本質がいかに最も優秀なものだとしても、そして、ゲルマン系言語の諸民族にはまだ北方人種の血が多く残っている⁴²⁾としても、繰り返された人種間の混淆によって北方人種の英雄的な力が失われてきている。このような考えもゴビノーに由来する⁴³⁾。たとえば、ギリシア人やローマ人は、人種というものの偉大さを理解せず、つまり人種意識が欠如していたために、混血を繰り返し、衰退してしまったのである⁴⁴⁾。

ギュンターの考えでは、ドイツ性の本質は北方人種の血によって規定されており、ドイツの良風美俗（*Gesittung*）を維持・強化するためには、北方人種の血を増加させねばならない⁴⁵⁾。そのためには、まずドイツ人のあいだで人種意識を喚起することが非常に重要

38) ゴビノーの人種論については、拙稿、『「ナチズムと人種主義」考（1）』、61頁を参照。

39) Günther, *Ritter*, S.138, 143.

40) Günther, *Rasse und Stil*, S.64.

41) *Ibid.*, S.30, S.45. ただし、ヨーロッパの偉大な哲学者がほぼ例外なく主として北方人種であるとしても、北方人種は全体として哲学や人文科学よりも自然科学に向いていることは明らかだという。S.45, Anm.2.

42) Günther, *Adel und Rasse*, S.99.

43) ただし、ギュンターは、ある民族において純粋に創造的な人種（＝北方人種）の核がしっかりと存在していれば、人種混淆は危険ではないという。要するに、指導者層レベルでの人種混淆によって、この核となる人種の血が薄まることが問題なのである。以下を参照。Günther, *Der nordische Gedanke*, S.85.

44) ローマの場合、当初、貴族と平民の結婚は禁止されていたが、北方人種の血は異人種婚によって純粋さを失い、こうしてローマ帝国の黄昏が始まったという。Günther, *Ritter*, S.140f.

45) Günther, *Der nordische Gedanke*, S.23.

となる。そして、その際に模範とすべきなのがユダヤ人であった。たしかに、ユダヤ人はさまざまな人種から構成されていて、「ユダヤ人種」なるものは存在しない。だが、ユダヤ人は、異民族のあいだで孤立して暮らし、厳格な宗教規定を遵守するという独特な生活状況の中で選別を行うことによって、「特殊ユダヤ的」なものを創り上げ、こうして、「準人種 (Rasse zweiter Ordnung)」になっている⁴⁶⁾。ドイツ人も、ユダヤ人のこのような「人種への忠実さ」から学ばねばならない。ユダヤ人であったイギリス首相ディズレーリが言ったように、「人種がすべてであり、他の真実はない。無思慮に血を混淆させるすべての人種は衰退しなければならない」からである⁴⁷⁾。

ところで、『人種学』には、450人以上におよぶ人びとの顔の写真や絵が掲載されており、それぞれの写真に「北方人種」、「主に北方人種」、「西方人種＝ディナル人種」などというキャプションがつけられている。これは、読者に人種の外観に対する意識を喚起させるためだという。というのは、今日では、人種を精査するまなざしが失われてしまっているからである⁴⁸⁾。ギュンターによれば、このようなまなざしを研ぎ澄ますことこそが、人種意識を喚起する第一歩なのであった。

③ 19世紀批判について。

第Ⅱ章で触れたように、ギュンターは民族至上主義運動で見られたような「人種」と「民族」の混同を強く批判していた。だが、自由主義や個人主義、あるいは大都市批判という点で、民族至上主義思想あるいは運動と多くの共通点をもっている。そもそもギュンターにとって、人種意識の衰退という点で致命的な転換をもたらしたのは、したがって諸悪の根源は19世紀であった。たとえば『騎士』の中で、彼は19世紀を次のように非難している。

この呪うべき19世紀は、新鮮な生命感情をヨーロッパから駆逐することに成功した。こうして、学問、芸術、道徳性、世界観、国家生活といったすべてが干からび、浅薄なものとなった。19世紀は、根を失い、逸脱した人間、方言をもたない人間、大都市生活者を大量に生み出した。19世紀は民族から大衆を作り出し、この価値なきくずに非英雄的、英雄敵対的な教えをたたき込んだ⁴⁹⁾。

『騎士』は、19世紀に対するこのような呪詛の言葉に充ち満ちており、ヒューマニズム、

46) *Ibid.*, S.57f. ただ、そのようなユダヤ人も、孤立状態や信仰上の結びつきの緩和のために、統一的な選別に従うことが困難になっているという。

47) Günther, *Ritter*, S.137.

48) Günther, *Rassenkunde*, S.7f.

49) Günther, *Ritter*, S.10f.

自由主義，民主主義，進歩信仰等々，19世紀が生み出したとされるものが非難，攻撃されている。

『北方思想』（1925年）——この著作では，ドイツ人のあいだに存在する北方人種の血を再び強化することをめざす北方運動の目標が提示されている——においても，このような19世紀批判が繰り返されており，その克服をめざすのが20世紀，つまりは北方運動だという。たとえば，19世紀は，教育と環境の改善を通して「人間の高貴化」を達成しようとしたのに対して，それは遺伝因子と選別によって決定されると考えるようになったのが20世紀（＝北方運動）なのである。また，19世紀は国民代表の多数決による「人類の進歩」を約束したが，20世紀は，人間の進歩は価値のある遺伝因子を増やすことによってしか可能ではないという認識を国民に求める，という具合である⁵⁰⁾。ここには優生学的発想も入り込んでいるが，この点については後に触れたい。

④ 英雄賛美について。

ギュンターが19世紀を，あるいは自由主義や民主主義，平等といった「19世紀的現象」を激しく攻撃するのは，それが「英雄的なもの」の対極にあるため，あるいは「英雄的なもの」を駆逐してしまうためである。

ギュンターによれば，英雄は世界の始まりに立ち，運命を生きる勇気をもち，死を恐れず，多くの者に憎まれる⁵¹⁾。ルター，ライプニッツ，ビスマルク，デューラー，グリューネヴァルト，カント——これらの英雄はすべて，まずそれぞれの時代が受け継いだものの中に入り込み，最終的には力強くこれを超え，後の時代に新しい内容を与えた⁵²⁾。英雄的な国家統治は，多数派の大臣や議員によってではなく，ビスマルクのような英雄によってしか行いえない⁵³⁾。

しかし，上記の引用からもわかるように，19世紀がすべてを台無しにしてしまったという。英雄は愛と憎悪を知っている。英雄性が高まれば，それだけ愛が豊かになると同時に，憎悪も激しくなる⁵⁴⁾。だが，19世紀の教育は，鍛え上げる代わりに弛緩させ，元気づける代わりに疲れさせ，闘いによって力を勝ち取る準備をさせる代わりに人びとを無害な者にしてしまった。要するに，人びとから「憎悪の力」を奪い取ってしまったのである⁵⁵⁾。

したがって，再び「英雄的なもの」をよみがえらせなければならない。そうするために

50) Günther, *Der nordische Gedanke*, S.11.

51) Günther, *Ritter*, S.10.

52) *Ibid.*, S.17.

53) *Ibid.*, S.123

54) *Ibid.*, S.47.

55) *Ibid.*, S.59.

は、ディズレーリのように「人種」を明白に意識することが肝要である。ギュンターによれば、英雄的な人種になろうとする意志をもつことだけでも、この時代にあつてはすでに英雄的行為である。そして、このような意志を呼び起こすことが、英雄的国家の第一の課題なのである⁵⁶⁾。

ワイマル期は英雄賛美、英雄待望の雰囲気満ちていたと言われるが、この意味で、ギュンターが『騎士』のような英雄賛美の書で大きな評判を得たことは、当然だったと言えよう⁵⁷⁾。

⑤ 優生学的措置の要請について。

処女作である『騎士』においては優生学的発想はまだほとんど見られないが、すでに触れたように、『北方思想』（1925年）には、遺伝的に優秀な子どもの数を増やし、遺伝的に劣等な者の出産を抑制するという考えが入り込んでおり、しかも、巻末には「ドイツ人種衛生学協会の原則」（1922年10月採択）が掲載されている。もっとも、同じ巻末の「付録Ⅱ」で、ギュンターは次のように主張している。「人種衛生学」は「人種」と関わる学問ではなく、住民の遺伝・選別現象を対象とするものであるので、「人種衛生学」という誤解を招くような名称よりも、「優生学（Erbgesundheitsforschung：直訳すれば遺伝健康研究）」という語がふさわしい、と⁵⁸⁾。

ハルテン／ナイリヒ／シュヴェーレントによれば、ギュンターの著作の重点は第三帝国になって、人種学から遺伝生物学的問題に移っていき、1941年に出版された『夫婦の幸福と遺伝的鍛錬のための配偶者選択』は、この変化を明白に示しているという⁵⁹⁾。しかし、すでに1920年代からギュンターの関心は人種学ばかりか、明確に優生学にも向かっており、『北方思想』では、「配偶者選択」の問題もすでに取り上げられていた。そこでは、北方人種の血の増加をめざす人種的課題と優生学の課題との関係について、以下のように述べられている。

56) *Ibid.*, S.155.

57) ギュンターの『騎士』は、若いヒムラーにも大きな影響を与えた。ヒムラーは1924年にこの本を2度読み、「僕が感じたり、考えたりしていることを、考え抜かれた言葉や文章で表現してくれる本だ」と日記に記している。以下を参照。Peter Longerich, *Heinrich Himmler. Biographie*, München 2008, S.87f.

58) Günther, *Der nordische Gedanke*, S.130-37. したがって、ドイツでは「人種衛生学」と呼ばれることが多いが、ここでは「優生学」と読んでおきたい。ちなみに、第三帝国では、このErbgesundheitという言葉の方が主流となる。たとえば、「遺伝病子孫防止法」によって設置されたのは、「優生裁判所（Erbgesundheitsgericht）」であった。

59) Harten/Neirich/Schwerendt, *op.cit.*, S.143.

人種的課題がドイツ人の唯一の課題というわけではなく、[・・・]ドイツ民族を構成するすべての人種には優生学的課題が与えられており、分別ある者すべての力を要請している。要するに断言できるのは、ドイツ人諸種族の中の主にディナル人種的人間や、主に東方人種的人間も、主に北方人種的人間と同様、自らの人種の保護を行うことができるということである。北方思想は、[・・・]諸人種間の競争を拒否するどころか歓迎する。そうすれば、良風美俗を破壊するような諸人種間の混淆を急速に阻止することができるだろう⁶⁰⁾。

このように、ギュンターは、彼が説く「北方思想」にとっても優生学が非常に重要であることを早くから認識していたのである。

以上、ギュンターの主張を5つの点について紹介してきた。この紹介からもわかるように、彼の主張に何ら目新しいものはなく、ゴビノーなどの人種論、民族至上主義思想、優生学者たちの主張を寄せ集めたものにすぎない。それでは、なぜこのようなギュンターの著作がベストセラーとなり、評判を呼んだのであろうか。次章では、この問題について考えるために、ギュンターの著作の特徴を検討してみたい。

IV

ギュンターの『人種学』は、多数の顔写真や図像が掲載されているとはいえ、500頁におよぶ大著で、しかも多くの注をつけるという学術書の叙述スタイルをとっており、けっして読みやすい本ではない。だが、すでにワイマル期から何度も版を重ね、大学生など教養市民層や市民層一般に広く受け入れられた。たとえば、ワイマル期最大の学生組合の機関紙は、ドイツ民族再生への道を示す「科学的」著作としてギュンターの本を読者に推奨している⁶¹⁾。このように、知識人が広くギュンターの著作を受け入れた理由の一つは、その「科学性」にあったと考えられる。

たしかに、ギュンターは北方人種を称揚してはいるが、けっして一方的な賞賛という形にはなっていない。そもそも彼は、北方人種それ自体を「最高の」人種、「最も高貴な」人種として称揚することは誤りであると述べている。ギュンターによれば、北方人種の血は、ゲルマン系諸民族にとってのみ価値があるのであり、現在の東アジアやアフリカの文化にとっては何の価値もない。また、ユダヤ人に関しても、彼らが劣等だというのは、(北

60) Günther, *Der nordische Gedanke*, S.110.

61) Michael Hau, *The Cult of Health and Beauty in Germany*, The University of Chicago Press 2003, p.152.

方人種的な）ドイツ民族の遺伝にとってであって、逆に、北方人種の人間が（西南アジア的な）ユダヤ民族の遺伝にとって劣等だということもありうるのだという⁶²⁾。『人種と様式』におけるドイツの「国民的作家」ゲーテの評価にも、ギュンターの「客観性」、「科学的厳密性」が示されているように見える。ゲーテを北方人種の英雄の一人として賞賛するのではなく、ゲーテの芸術では、平穏さを求める東方人種の傾向が、繰り返し、北方人種の厳格さおよび感情の抑制と一緒にあって、「快活さ」とでも言うべきものが創り上げられているのだという⁶³⁾。

ギュンターが「民族」と「人種」の混同を強く批判していることは、すでに述べた。この厳格な区別も、彼の「科学性」を保証しているように見えたものと思われる。ワイマル期の1926年2月から季刊誌として刊行されるようになった『民族と人種』という雑誌がある。この雑誌は、ギュンターの著作の大半を出版したミュンヘンのレーマン社から出されたもので、編集委員には多くの大学教員が名を連ねている。その創刊号の巻頭の論考「民族と人種」——著者は編集長のハンプルク大学人類学講師ヴァルター・シャイト——でも「民族」と「人種」の混同が戒められている。それによれば、民族学はある人間集団の精神的現象を対象にし、人種学は遺伝因子を研究するのである。しかし、精神的現象と遺伝因子のあいだに何らかの関連があることには疑う余地はなく、したがって、人文科学的な民族学と自然科学的な人種学の緊密な協力が求められる。『民族と人種』はこのような協力を寄与するものだという⁶⁴⁾。

ギュンターの『人種学』は、まさにこのような人文科学と自然科学の「総合」をめざしたものであり、そのようなものとして広く受けとめられたと言えよう。ギュンターの著作が、第三帝国期に書かれた教育学関係のテキストの中で、最も引用頻度が高かった⁶⁵⁾ということも、当時の知識人の多くが彼の人種論を「科学的著作」と評価したことの表れであろう。

「科学性」と並んで、「ビジュアル性」もギュンターの著作の大きな特徴である。第Ⅱ章で触れたように、『人種学』には多くの人びとの顔写真や図像が掲載され、それぞれに人種的帰属を示すキャプションがつけられている。どのような顔かたちが、どの人種に属するのかが一目でわかるようになっているのである。しかもその際、たんに「北方人種」や「東方人種」という単一の人種帰属だけではなく、ほとんどの人間は混血であるというギュ

62) Günther, *Der nordische Gedanke*, S.77.

63) Günther, *Rasse und Stil*, S.75.

64) Walter Scheidt, Volk und Rasse. Einführung in den Arbeitsplan der Zeitschrift., in: *Volk und Rasse. Illustrierte Vierteljahresschrift für deutsche Volkstum*, 1. Jg. H.1(Feb. 1926), S.1-6.

65) Harten/Neirich/Schwerendt, *op.cit.*, S.86.

ンターの主張に沿って、「東方人種=北方人種」や「東方人種=ディナル人種」といった表示や「主に北方人種」、「主に西方人種」という表示がつけられている。さらに、「主に東方人種—北方人種の特徴も」、「主に北方人種—ディナル人種の特徴も」という具合に、非常に厳密に診断が下されているかのような表示も数多く見られる（図1～図6を参照）⁶⁶⁾。

このように多数の人の顔を人種表示付きで提示することによって、ギュンターはさまざまな人種の外観を「ビジュアル化」したのである。ギュンター自身、人種を精査するまなざしを鍛え上げ、人種意識を喚起することをめざしていたが、彼の人種分類は、第三帝国期には、学校や党の諸団体においても教材として利用された。とくに、「人種的エリート組織」を標榜する親衛隊では、ギュンターが提示した人種の多様な表現型が隊員の選別



図1 北方人種



図2 主に西方人種—北方人種の特徴も



図3 ディナル人種=北方人種



図4 東方人種=ディナル人種



図5 主に東方バルト人種—東方人種の特徴も

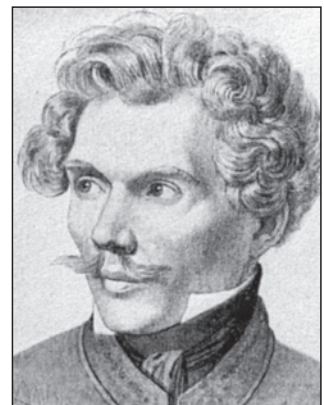


図6 東方バルト人種=北方人種

66) なかには、「東方人種=ディナル人種?」というように、疑問符がつけられているキャプションもあり、このことも診断の「厳密性」を示しているように見える。図1～図6は以下に掲載されている。Günther, *Kleine Rassenkunde*, S.22, S.27, S.35, S.38, S.39.

の重要な基準になったという。また、親衛隊員の人種意識を強化し、隊員の配偶者選びにも役立てるために、人種表示付きのスライドを見せる巡回講演会も開かれた⁶⁷⁾。このように、第三帝国においては、ギュンターの著作の「ビジュアル性」が人種主義教育のために大いに利用されたのである。

おわりに

ギュンターの人種論は、人文科学と自然科学を総合するような内容をもっており、その「科学性」ゆえに多くの知識人を惹きつけた。また、外観から人種を判断できるまなざしを鍛えることを重視し、多くの顔写真を掲載することによって、人びとが日常生活で目にする顔からその人の「人種」を判定できるような「基準」を提示した。このようなギュンターの人種論がすでにワイマル期からベストセラーになっていたことは、ワイマル期における人種意識の高まりを示すとともに、逆に、彼の著作が人種意識をさらに高めるのに貢献したということもできるであろう。

とはいえ、本稿ではギュンターの人種論だけを取り上げたにすぎず、ワイマル期における人種論の広がりについて検討するためには、まだまだ多くの課題が残されている。たとえば、ハウは、ギュンターなどワイマル期の人種論を、教養市民層の将来への不安や、当時の社会への不満を表現したものであるとして、帝政期からの生改革運動との連続性の中に位置づけている⁶⁸⁾が、この問題については、ナチズム期との連続性をも射程に入れた検討が必要だろう。

ギュンターは、民族至上主義運動に見られたような、「民族」と「人種」の混同を強く批判しているが、他方で、人種を重視し、ドイツ民族の「北方化」をめざすギュンターの見解に対して、民族至上主義運動の側も批判の声を挙げている⁶⁹⁾。生改革運動、民族至上主義運動、そしてギュンターの人種論、これらの思想や運動がどのような関係を取り結びながらナチズムに流れ込んでいくのか。この問題は、「ナチズムと人種主義」について考えるために検討しなければならない重要な課題であろう。

67) Paula Dietl, *Macht – Mythos – Utopie. Die Körperbilder der SS-Männer*, Berlin 2005, S.105-109.

68) とくに第7章を参照。Hau, *op.cit.*, pp.150-175.

69) たとえば、「ドイツ民族は、人種的にほぼ均一である」という批判や、ドイツ民族の「北方化」は民族至上主義的ではない、という批判などである。Günther, *Der nordische Gedanke*, S.29f, S.61.